

若者の意欲やモチベーションを再考する

JILPT 主任研究員 下村英雄

いつからか、若者のキャリア支援・キャリア教育の文脈で「意欲」や「モチベーション」を論じることが、ひどく難しくなった。

今、正面切って、意欲やモチベーションを問題にすれば、すぐさま若者の問題を意識の問題にすり替える「心理主義」「自己責任論」「新自由主義」と批判されてしまう。しかも、ある種の論者達は、そうした語彙で相手を批判してきた場合、それを決定的な勝利と感じるらしく、どこか得意げでさえある。学問領域によっては、いかに巧みにこうした論じ方をできるかが、その領域に対する忠誠心を示す踏み絵にもなっているのであろう。

ただ、私は、こういうことになった発端というか瞬間を間近で目撃していたように思う。それは、明らかに2000年前後にフリーターについて、集中的に研究がなされた時である。それ以降、陸続と発表された2000年代を彩る優れた若年就労問題に関する研究は、基本的には若者の意識に話を持っていかず、これをいかに社会全体の問題と

して論じるかを議論の基調としてきた。それは戦前戦後と連綿と続けられてきた進路指導研究・職業指導研究の大きなパラダイムシフトであり、そう言って良ければ一大革命であったとさえ思う。

この革命によって、若者の就労の問題を単純に意識の問題にするのではなく、より社会的な視点から、政策的な視点から論じる道が開かれた。その後、約15年の月日を経て、今では、各種の若年支援を組み合わせることで、一定の方向に向かって進んでいけるような仕組みや制度は、それなりに充実したと言って良いだろう。

——しかし。仕組みや制度が整備されるにつれて、改めて、人々は、意欲やモチベーションといったもののおぼろげに気づくことになった。いかに社会の仕組みを整えようとも、いかに支援の仕組みを作ろうとも、意欲やモチベーションを持たない個人を支援することは難しい。仕組みや制度を整えれば、自然と前に向かっていけるほど、人間の意識は単純なものではない

のだろう。むしろ、ハード面の環境が整備されるほど、やるかやらないかという最初の一步が決定的な要因となる。こういう「ファンダメンタルな動機づけ」とも言うべき問題の重大さが、キャリア支援・キャリア教育の最前線に立つカウンセラーやコンサルタントのような人達に改めて気づかれるようになったのである。

特に、様々な社会経済的な環境要因、それは家庭環境や学歴のようなものまで含み込むのであろうが、そうしたものを勘案して、自分が必ずしも有利な条件に恵まれていないと悟った時、人はもはや自分の可能性を信じられなくなる。そうなった時、結局、重要となるのは、目の前の高い壁を乗り越えると決意する最も素朴な意味での意欲やモチベーションであろう。それを自己責任論の名のもとに封じてしまえば、もはや解決策は容易には見当たらなくなるはずである。

したがって、今どきのキャリア支援・キャリア教育研究は、こうした類の問題を自己責任論のような語彙で考えることなく、どう



すれば社会全体として個人の意欲やモチベーションに適切に刺激を与え、活性化させ、行動を促せるのに関心を移している。意欲やモチベーションを失った若者を、再び社会に取り込むことを論じる「キャリアガイダンスと社会正義 (social justice)」の議論が、先進各国の専門家の間で盛んに行われている。そして、ここで改めて重視されているのは、やはり検査や相談といった伝統的な手法でもあるのだ。

今こそ、個々人の意欲やモチベーションといった意識の問題をどう社会全体の問題として考えていけるのか、レッテル貼りのゲームを横目に、地道に静かに議論を進めていく必要があるだろう。